

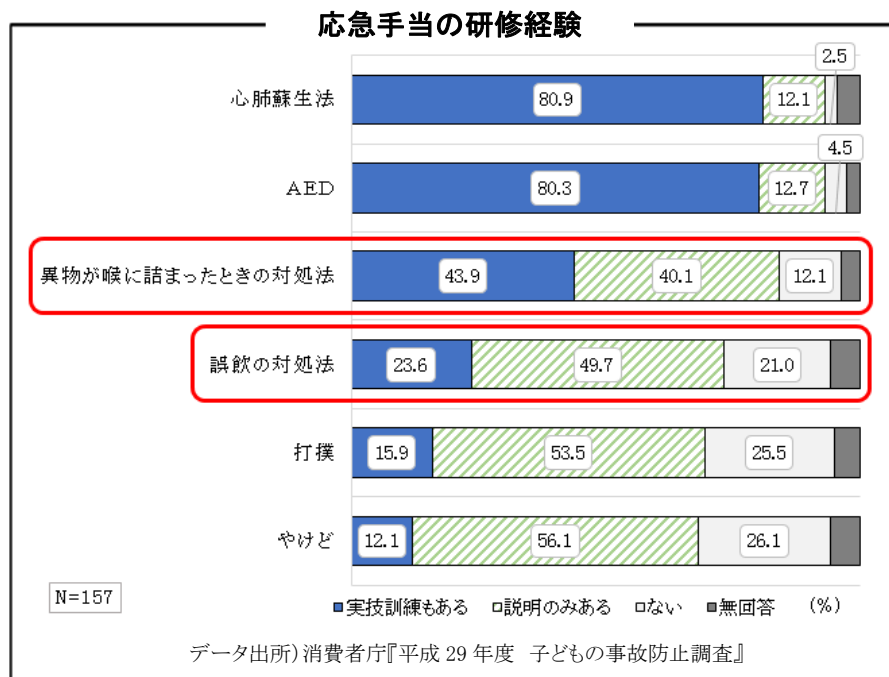
消費者行政新未来創造オフィス
 子どもの事故防止プロジェクト・レポート

令和2年6月 17 日

保育園等における窒息や誤飲に関する事故防止対策の重要性
 —「保育士アンケート」結果から—

ポイント

- ・保育士が保育中に、子どもの窒息や誤飲に関するヒヤリ・ハットを経験したことがあると回答した割合は約3割。
- ・保育園等では事故防止対策が講じられているが、外部情報の収集や共有、子どもへの安全教育に関して不十分な面がみられる。
- ・応急手当方法の研修経験に関して、心肺蘇生法とAEDは8割以上が実技訓練の経験があるのに対し、窒息や誤飲の対処法は実技訓練の経験割合が低いことが分かった（下図参照）。
- ・保護者からは、保育園等からの事故防止に関する情報提供が期待されている。
- ・外部からの情報に対してアンテナを張り、発信者となる保育関係者の知識をより深めていくことが事故防止につながると考えられる。



1. はじめに

消費者庁では、平成 29 年度、徳島県内の0～6歳児の保護者又はこれから保護者になる方や保育士へのアンケート調査を行い、事故防止に向けた保護者等の知識、意識及び行動を把握するとともに、関係機関等で実施されている取組についてアンケートやヒアリングを行いました¹。

このうち、保育士を対象としたアンケート(以下「調査」という。)では、ヒヤリ・ハットの経験や事故を防ぐための対策・研修、事故防止に関する情報、安全教育に関すること等について尋ねています。調査の概要を図表1に示します。

本レポートでは、この調査結果を基に、やけどや転倒、転落、挟む、切るといった0～6歳の子どもに予期せず起こる様々な事故の中でも、いざ発生すると、短時間で重篤な症状となる可能性がある窒息²、誤飲事故について見ていきます。

図表 1. 調査の概要

調査対象	徳島県や徳島県保育事業連合会が主催する保育関係者向けの研修会に参加した保育関係者
調査日	平成 30 年 1 月 7 日、平成 30 年 1 月 12 日
調査方法	会場配布／会場回収
調査数及び有効回答数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査数：179 人 ・ 有効回答数：157 票（有効回答率：87.7%） ・ 回答者の内訳：男性（6 票）、女性（143 票）、 その他³（8 票）

2. 保育園等でのヒヤリ・ハットの経験

調査では、日中、多くの子どもたちが過ごす保育園等でのヒヤリ・ハットの経験を保育士に尋ねたところ(図表2)、屋内では「ドアやサッシ等での指はさみ事故」(65.6%)や「家具の角等による切傷・打撲」(59.2%)、屋外では「遊具に関する事故」(61.8%)の経験が多くありました。窒息や誤飲に関しては、「食べ物による窒息」(28.7%)、「小さなおもちゃやアクセサリ等の誤飲事故」(28.0%)について約3割の方がヒヤリ・ハットの経験があると回答しています。

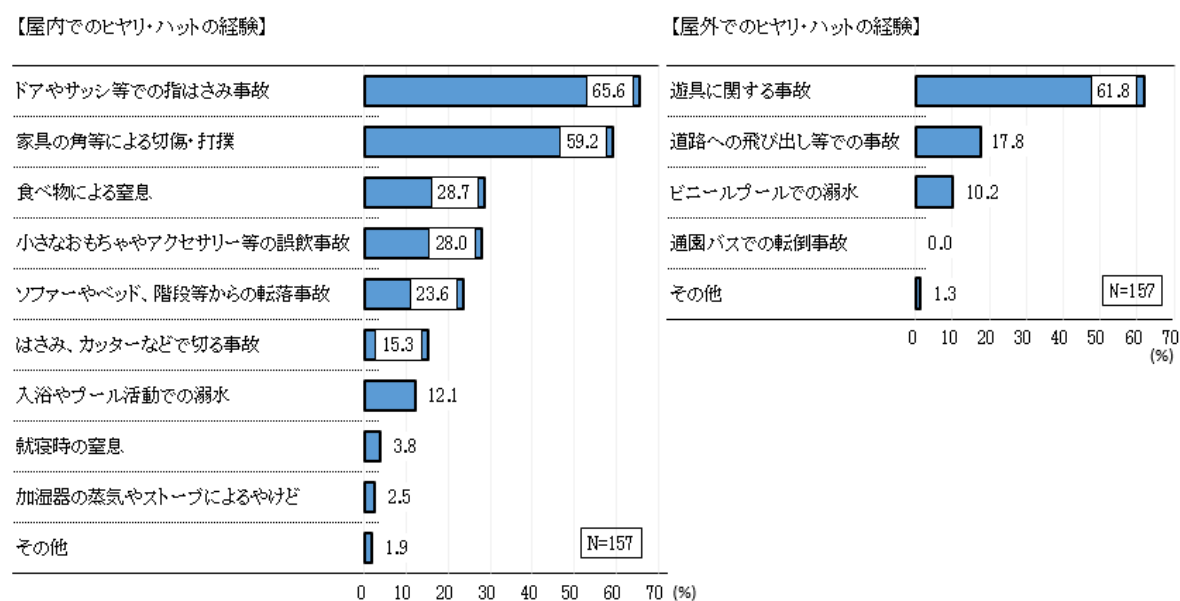
¹ 「平成 29 年度子どもの事故防止調査—調査報告書—」

URL: http://www.caa.go.jp/future/project/project_006/pdf/project_006_180523_0002.pdf

² 本レポートでは就寝時の窒息については扱わない。

³ 性別の回答が無回答のもの。

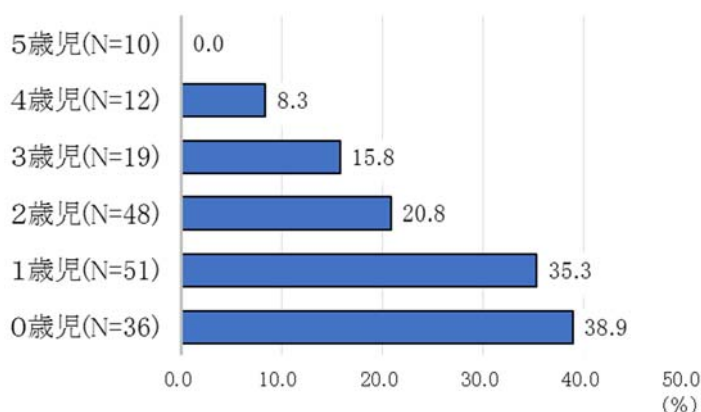
図表2. 子どもが事故に遭いそうになった(ヒヤリ・ハットした)経験



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

「食べ物による窒息」に関してヒヤリ・ハット経験がある保育士を、担当する子どもの年齢別にみると(図表3)、4歳児クラスでは 8.3%、3歳児クラスでは 15.8%、2歳児クラスでは 20.8%、1歳児クラスでは 35.3%、0歳児クラスでは 38.9%と、年齢が下がるにつれ経験割合が高くなりました。

図表3. 食べ物による窒息のヒヤリ・ハットの経験(年齢別)



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

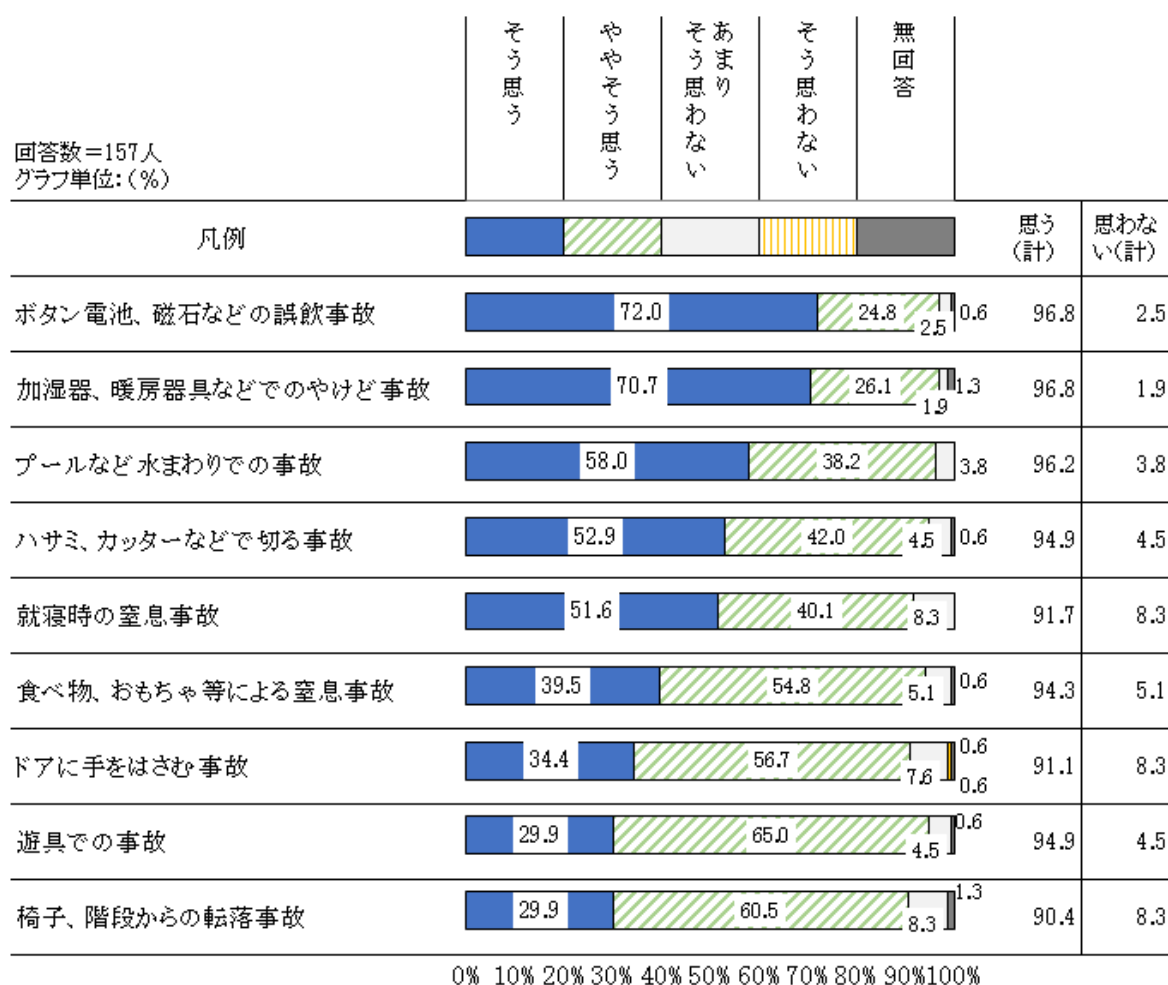
※複数クラスを担当している者については、それぞれにカウント

なお、「小さなおもちゃやアクセサリ等の誤飲事故」でも0歳児クラスのヒヤリ・ハットの経験者が最も多くなりました。これらのことから、窒息や誤飲に関するヒヤリ・ハットの経験は、この調査では0歳児クラスが最も多く、小さい子どもほど特に注意が必要ということが分かりました。

3. 保育園等における事故対策

では、保育園等では日頃どのような安全対策をとっているのでしょうか。保育園等施設内の事故防止対策について見てみました(図表4)。事故の対策が徹底されていると思う(「そう思う」と「ややそう思う」の合計)という回答が全ての項目で9割を超えており、事故を防ぐための対策が実施されていることが分かりました。ただし、「ボタン電池、磁石などの誤飲事故」の対策の徹底については、「そう思う」(72.0%)が「ややそう思う」(24.8%)を大きく上回る一方、「食べ物、おもちゃ等による窒息事故」については「そう思う」(39.5%)が「ややそう思う」(54.8%)を下回りました。

図表4. 所属する保育園等で事故対策が徹底されていると思う割合



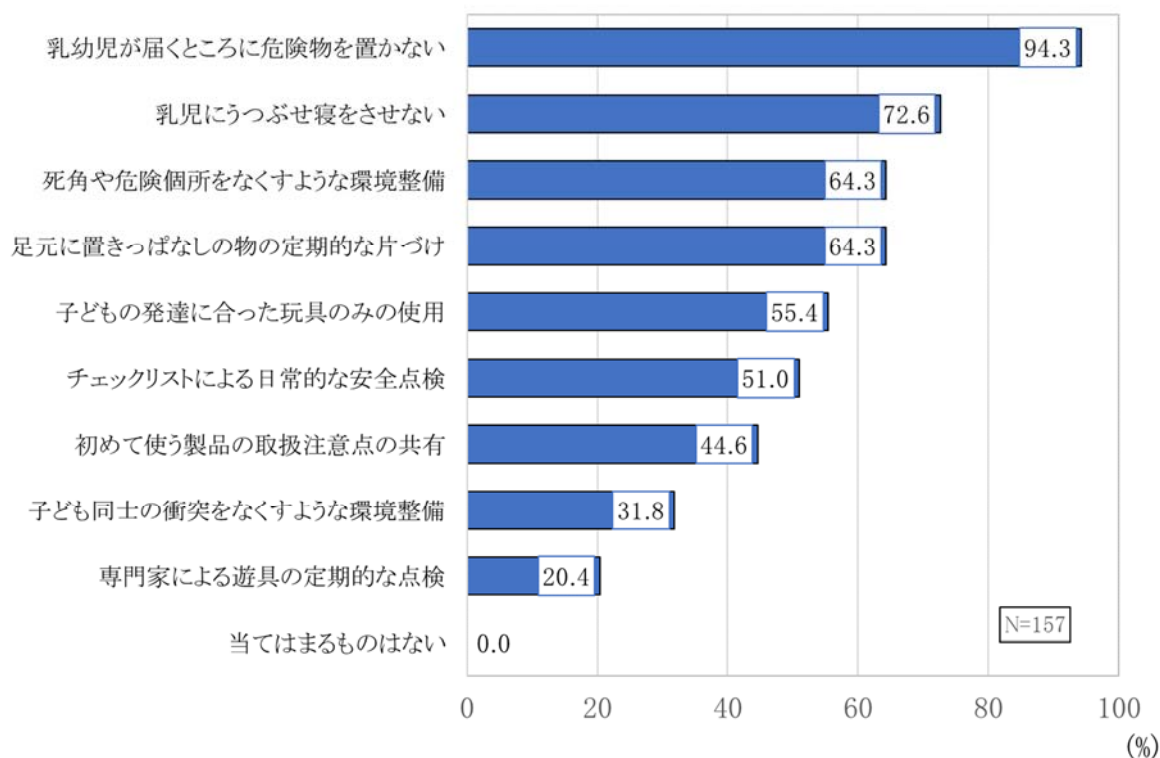
※思う(計) = 「そう思う」+「ややそう思う」

※思わない(計) = 「あまりそう思わない」+「そう思わない」

データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

また、事故防止のために保育園等で欠かさず実施していることについて(図表5)、「乳幼児が届くところに危険物を置かない」は 94.3%と高い割合で実施されていることが分かりました。一方で、「足元に置きっぱなしの物の定期的な片づけ」は 64.3%、「子どもの発達に合った玩具のみの使用」は 55.4%、「チェックリストによる日常的な安全点検」は 51.0%の実施率となり、各項目で差が出る結果となりました。

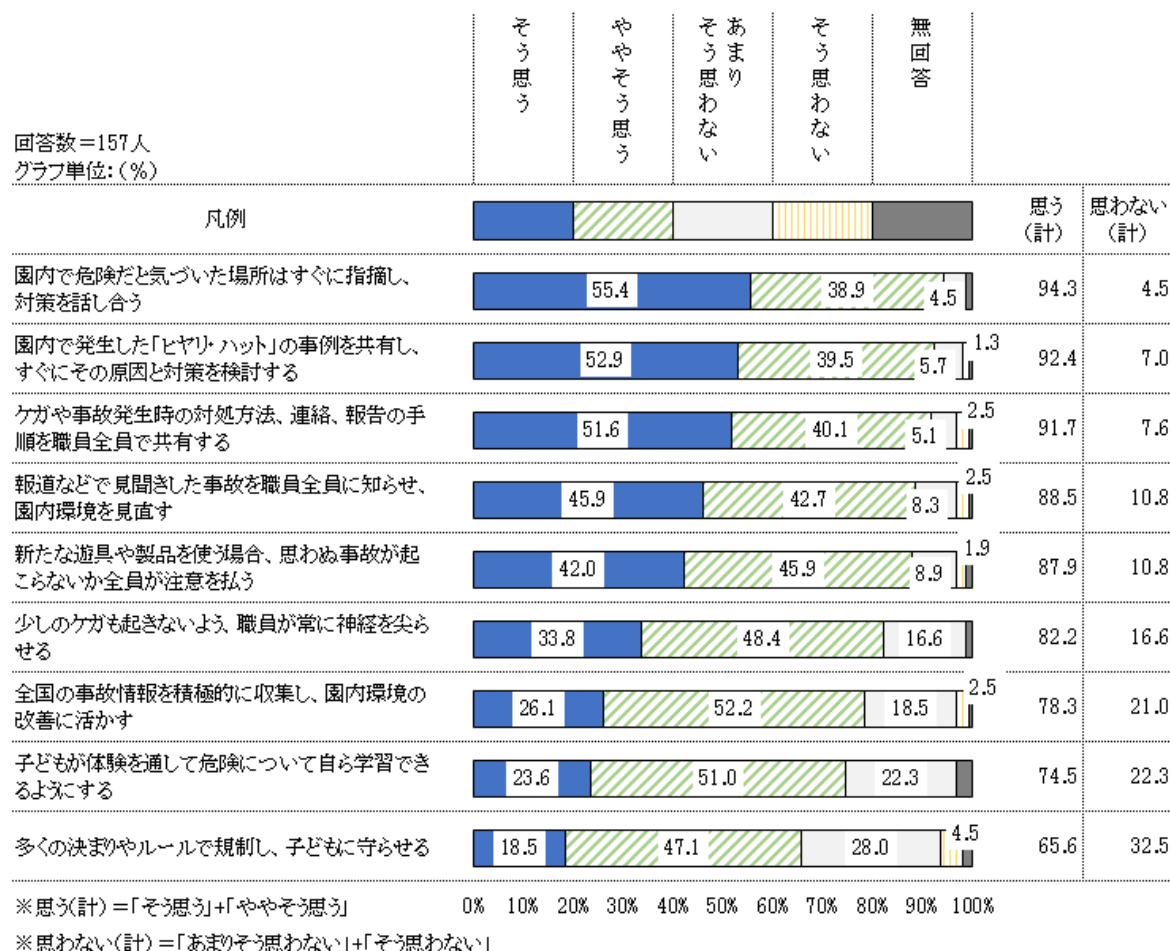
図表5. 事故防止のために保育園等で欠かさず実施していること



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

さらに、窒息・誤飲事故に限らず回答者の所属する保育園等において事故防止対策が徹底されている項目を比較しました(図表6)。保育園等で発生したヒヤリ・ハットの事例や危険な箇所等につき、職員が情報共有し、対策等を検討する内容については「園内で危険だと気づいた場所はすぐに指摘し、対策を話し合う」(94.3%)、「園内で発生した「ヒヤリ・ハット」の事例を共有し、すぐにその原因と対策を検討する」(92.4%)、「ケガや事故発生時の対処方法、連絡、報告の手順を職員全員で共有する」(91.7%)の項目において対策が徹底されていると思う(「そう思う」と「ややそう思う」の合計。以下同じ。)との回答割合が9割以上あり、対策が徹底されていることが確認できました。

図表6. 所属する保育園等で事故対策(職員間の連携や安全教育等)が徹底されていると思う割合



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

一方で、「報道などで見聞きした事故や全国の事故情報を積極的に収集し、園内環境の改善にいかす」といった、外部の情報にアンテナを張って共有する内容については、対策が徹底されていると思うと回答した割合は前述の「園内で危険だと気づいた場所はすぐに指摘し、対策を話し合う」、「園内で発生した「ヒヤリ・ハット」の事例を共有し、すぐにその原因と対策を検討する」より低くなりました。例えば「報道などで見聞きした事故を職員全員に知らせ、園内環境を見直す」(88.5%)、「全国の事故情報を積極的に収集し、園内環境の改善に活かす」(78.3%)と約8割にとどまっています。

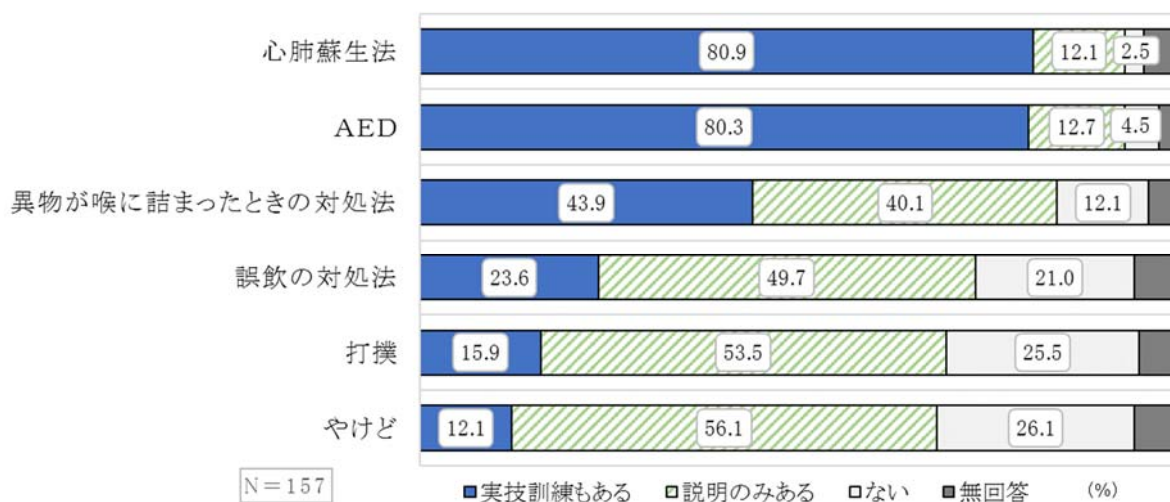
また、子どもへの体験を通じた危険についての学習や、ルールを守らせるといった安全教育に関する内容については、「子どもが体験を通して危険について自ら学習できるようにする」(74.5%)や「多くの決まりやルールで規制し、子どもに守らせる」(65.6%)の項目において対策が徹底されていると思うと回答した割合が他の項目と比較して低い結果となりました。

4. 応急手当の説明や訓練を受けた経験

事故の発生を防止する対策と共に、万一事故が起きた際の対処ができるかという点も重要です。応急手当についての説明や実技訓練を受けた経験について尋ねたところ、手当の内容で異なる結果となりました(図表7)。6項目全ての応急手当方法について、6割以上の方が何らかの講習を受けた経験(「実技訓練もある」+「説明のみある」)があり、特に「心肺蘇生法」と「AED」については8割以上の回答者が実技訓練も経験していました。一方で、「異物が喉に詰まったときの対処法」(43.9%)、「誤飲の対処法」(23.6%)、「打撲」(15.9%)、「やけど」(12.1%)の実技訓練の経験割合は、「心肺蘇生法」及び「AED」と比較すると低くなりました。

また、説明や実技訓練共に経験がない回答もあり、乳幼児で起こりやすく、短時間で重篤な症状に陥りやすい窒息や誤飲の対処法について研修や啓発の機会を設ける必要があると考えられます。

図表7. 応急手当の研修経験



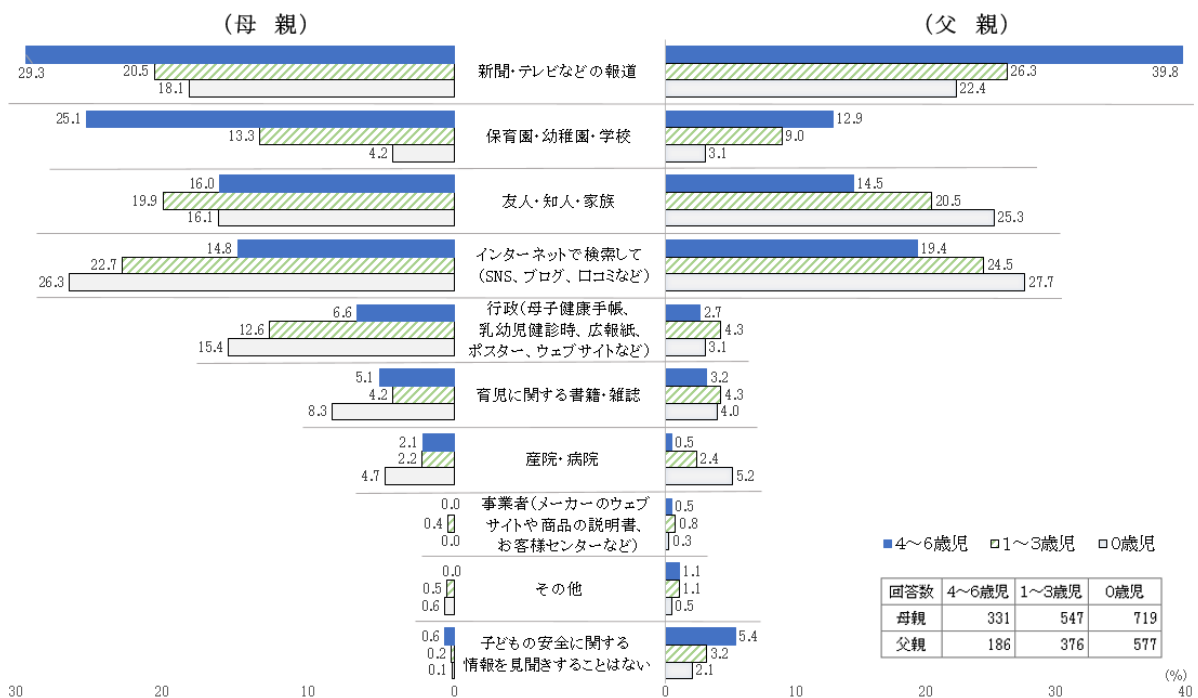
データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

5. 保護者にとっての子どもの安全に関する情報の入手先

子どもの事故はどのような環境で発生しているのでしょうか。事故情報データバンク⁴に登録された、令和元年度に発生した0歳から4歳までの事故情報をみると、保育園等における保育中の事故が25.2%であるのに対し、住宅や外出先等における保護者等の下で発生した事故は74.8%でした⁵。よって、家庭での事故予防を保護者に啓発することは重要です。

図表8は、保護者を対象とした子どもの事故防止調査において、子どもの事故防止に関する情報の入手先を尋ねた結果を示しています。入手先10項目のうち最も役に立つもの一つを尋ねたところ、4～6歳児の母親と1～3歳児、4～6歳児の父親では「新聞・テレビなどの報道」が最も多く、0歳児、1～3歳児の母親と0歳児の父親では「インターネットで検索して(SNS、ブログ、口コミなど)」が最も多くなりました。

図表8. 子どもの事故防止に関する情報入手先として最も役に立つもの



データ出所) 消費者庁『平成 29 年度 子どもの事故防止調査』

注) 有効回答数: 0歳児 1,305 票(父 577 票、母 719 票、その他9票)、1～3歳児 929 票(父 376 票、母 547 票、その他6票)、4～6歳児 518 票(父 186 票、母 331 票、その他1票)

注) 有効回答率: 0歳児 35.4%、1～3歳児 21.7%、4～6歳児 13.4%

⁴ 「事故情報データバンク」は、消費者庁が独立行政法人国民生活センターと連携し、関係機関から「事故情報」「危険情報」を広く収集し、事故防止に役立てるためのデータ収集・提供システム(平成 22 年4月運用開始)。事実関係及び因果関係が確認されていない事例も含む。

⁵ 令和2年5月 20 日時点の登録情報。事故情報 119 件のうち、発生施設場所や商品などの分類から精査。保育園等における保育中の事故は 30 件、住宅や外出先等における保護者等の下で発生した事故は 89 件。

「保育園・幼稚園・学校」についてみると、年齢が上がるにつれて回答者の割合も増加しています。特に4～6歳児の母親では2番目に高い25.1%の回答があり、保護者は子どもの事故防止に関する情報を保育園や幼稚園、学校から入手し、活用していることが分かりました。

6. 更なる事故防止に向けて

ここまで見てきたように、保育士における誤飲や窒息に関する対処方法についての実技訓練経験者は、心肺蘇生法やAEDと比較すると低い現状にあります。誤飲や窒息は、他の事故に比べて発生から短時間で重症化しやすいという特徴があり、保育現場におけるヒヤリ・ハットの経験率は約3割に上ることから、誤飲や窒息に対する実技訓練の機会を今後更に増やしていくことの重要性が確認できました。

そして、子どもの事故のうち、4分の3程度が保育園等における保育中以外の環境下で発生していること、また保育園等が事故防止の情報の入手先として期待されていることから、保護者に対して事故に対する情報提供を積極的に担う役割としての保育園等の重要性も確認できました。このことから、保護者の事故予防等に関する情報入手や知識を深めるため、保育園等では内外の情報の収集や共有を一層強化することも重要でしょう。

【問合せ先】

消費者庁 消費者行政新未来創造オフィス（消費者安全課）

担 当： 福居、北島、上原、村瀬

電 話： 088-600-0004(直通)

088-600-0023(直通)

088-600-0024(直通)

088-600-0028(直通)

FAX： 088-622-6171